

## 第5章

まとめ・考察

## 第5章 まとめ・考察

### (1) 子供の読書の現状・課題

本調査研究では、調査目的のAとして、「小学生、中学生、高校生の読書の実態や不読の背景・理由等を把握するための調査を実施し、課題を明確にするとともに、不読解消のための方策等について検討を行う」と設定し、小学生・中学生・高校生、及び、その保護者を対象とした質問紙調査を実施した。

#### <全体状況の概要>

調査の結果から、全体的な傾向として、小学生から中学生、高校生になるにつれて読書をする者の割合が減っていく状況にあることについて、あらためて把握をすることができた。高校生では1日あたりに全く読書をしない者が5割を超え(図表2-2-1、図表2-2-2)、同様に、1か月に読んだ本の冊数が0冊の者も5割以上となっている(図表2-3-1)。高校生では、学校図書館(図書室)や地域の図書館を利用しない者の割合についても小学生や中学生と比較して高く(図表2-8-1、図表2-8-2)、高校生になって以降、感動したり興味を持ったりした本に新たに出会っていない可能性がある者が多いこともうかがえた(図表2-6-3)。

#### <不読の背景>

小学生・中学生に関しては、1か月に読んだ本の冊数が0冊の者は高校生と比べると少ないが、一定割合では見られ、その理由として、TVやインターネット、ゲームなどの、読書以外の娯楽・趣味に時間がとられている者の割合が相対的に高くなっている(図表2-4-1、図表2-4-2)。また、中学生では、読書習慣が身についていないために本を読まなくなっている者も多いのではないかと考えられる。

なお、小学生・中学生については、ふだん学校のある日には本を読むが、学校のない休みの日には読まないという層が比較的多く存在することがわかる(図表2-2-1、図表2-2-2)。このような背景として、学校のある日に関しては、学校で行われている、一斉読書の時間などの取組の影響により本を読むようになっているものが一定程度いることがうかがえる(図表2-5-1、図表2-5-2、図表2-10-1)。

高校生に関しては、学校で読書に関する取組が行われている度合いが低いと考えられる(図表2-10-1、図表2-10-2)ほか、勉強や部活動・生徒会活動等に時間がとられていること、読書習慣が身についていないことなどが、不読の理由として挙げられている(図表2-4-3)。なお、本を読んでいる者のなかでも高校での取組に影響を受けたとしている者の割合は必ずしも高くなく、書店やテレビ、雑誌、新聞、ネット等から影響を受けている者の割合が高い(図表2-5-3)。

#### <本を読むことに影響を与えうる諸要因>

高校生で不読率が高いが、必ずしも全員が本を読まないわけではない。その差異に影響を与えようと考えられる要因として、性別の差が挙げられる(図表3-1-1)ほか、保護者の読書習慣(図表3-1-3)、家庭の蔵書数(図表3-1-5)、学校図書館(図書室)の充実度(図表3-1-9)、学校での読書に関する活動状況(図表3-1-11)、学校図書館(図書室)の授業での活用状況(図表3-1-13)がそれぞれ考えられる。なお、家庭の蔵書数や学校図書館(図書室)の充実度、学校での読書に関する活動状況については、小学生・中学生の不読率や読書冊数の多寡とも関連性があることがうかがえる。

また、これら保護者の読書習慣、家庭の蔵書数、学校図書館（図書室）の充実度、学校での読書に関する活動状況、学校図書館（図書室）の授業の活用状況等については、それらが行われている（充実している）場合においては、それだけ、児童・生徒自身が本を読むようになったことに影響を受けたと思うこととして認識されている割合が高くなっている（図表 3-2-4～図表 3-2-21）。特に、中学生にとっては、学校内でそのような取組があることによって、影響を受けるという者が多いのではないかということも把握された（図表 3-2-14、図表 3-2-20）。

このほか、友達同士でおすすめの本を紹介したり、貸し借りをしたりすることによって本が読まれるということもあるのではないかということがうかがえる（図表 2-5-1～図表 2-5-3、図表 2-7-1～図表 2-7-3）。また、小学生・中学生・高校生ともに、どのようにすればもっと本を読みたくなると思うかについて、「学校図書館（図書室）に好む本を置くようにする」の回答割合が最も高い（図表 2-12-1～図表 2-12-3）が、読みたいと思う本が必ずしも明確になっていないこと、もしくは、それらの本が身近な場所に十分に整備されていないことにより、読書の機会が制約されてしまっているという状況があるのではないかということも推察される。

#### <課題認識等>

児童・生徒の読書量を増やしていくこと等を考えた場合に、上記のように、家庭・保護者による取組の影響、及び学校での取組や学校図書館（図書室）の充実が及ぼす影響があると想定されるが、家庭・保護者による取組に関しては、就学前の段階から、取組が実施できている保護者と、そうではない保護者とに分かれている状況にあることがうかがえる（図表 3-3-3）。

また、高校生になるにつれて、スマートフォン・携帯電話に接する時間が長くなる者が増えるほか、勉強・部活動等で時間がとられることにより、本を読まなくなっているという課題認識は持たれながらも、なかなか対応が難しい状況にあるのではないかということがうかがえる（図表 3-3-1、図表 3-3-6）。このほか、学校以外の地域資源が必ずしも豊かであるというわけではなく、子供たちだけでアクセス可能な図書館や書店、施設等が十分にはないこと、また、学校図書館（図書室）に関しても、司書の配置状況等に課題があることがうかがえる（図表 3-3-2）。

## (2) 子供の読書推進のための取組状況、取組推進に関する課題

他方、上記のような現状・課題がある中で、各地域で様々な取組が推進されている。本調査研究では、調査目的のBとして、「各自治体（都道府県、市区町村）で実施されている子供たちの読書推進に関する取組のうち、地方公共団体、学校、図書館、民間団体、ボランティア等の連携・協力により実施されている取組について、その連携・協力手法等に注目して調査・分析を行い、特徴等を明らかにする」を設定し、地域での取組状況について把握を行った。

### <全体状況の概要>

全体的な状況としては、家庭において図書館や書店に子供と一緒にいく機会を増やしたり、子供に対して直接的に本・読書を勧めたりする取組が行われていることが把握された(図表 4-1-1、図表 4-1-2)ほか、就学前の段階及び小学校では、多くの場合、ボランティアやサークル団体等との連携・協力により、子供に対する読み聞かせが行われている(図表 4-2-1、図表 4-2-2)。また、必ずしも連携・協力によるものではないが、小学校・中学校では一斉読書の時間が設定されていることが多く(図表 4-2-2、図表 4-2-3)、そのことによって読書推進が図られていることがうかがえた。高等学校では一斉読書の時間についても必ずしも設定されている学校が多いわけではないが、他方で、読書会やブックトーク、ビブリオバトル等の取組については、小学校や中学校段階と比較して相対的に取組事例が多くなっている(図表 4-2-4)。

### <内容・テーマ別の取組状況、推進ための課題点等>

上記のような主な取組のほか、地域で実施されている多様な取組について、「①幼少期における取組、家庭・保護者を巻き込んだ取組」「②学校における取組、学校図書館・授業での取組」「③学校と公共図書館・民間団体等との連携」「④青年期における取組、(再び)興味を持ってもらうための取組」「⑤地域内での連携、学校種間の連携」の内容・テーマ別に情報を把握した。

以下では、あらためて把握された取組事例の概要を整理するとともに、それぞれの取組事例から把握された、今後の取組推進にあたり課題となりうることを整理した。今後同様の取組を他の地域で推進していく際等には、これらの事例から把握された情報が参考になるのではないかと考えられる。

#### 【幼少期における取組、家庭・保護者を巻き込んだ取組】

「①幼少期における取組、家庭・保護者を巻き込んだ取組」に関しては、保護者自身に子供の読書に関する取組に関わってもらうことで家庭での読書推進等を図っていこうとする動きがあることがうかがえ、高知県では、公共図書館等へのアクセスが難しい中山間地域等での読書活動を推進していくことを目的に、読書ボランティア養成講座が実施されている。また、潟上市では、「ブックスタート」のフォローアップ事業として、小学校に入学する者を対象とした「わくわくブック」の事業が実施されている。

読書ボランティア養成に関しては、今後いかにして取組への参加者・賛同者を増やしていくかが課題になるということがうかがえた。PTA との連携・協力により実施されている他の取組についても共通した課題が挙げられている。また、「わくわくブック」の事業は、子供たちに「喜ばれる」ものであるが、どのように図書館活用につなげていくかという点が課題として挙げられている。

**【学校における取組、学校図書館・授業での取組】**

「②学校における取組、学校図書館・授業での取組」に関しては、必ずしも学校外の機関・団体等との連携・協力により実施されているわけではないが、例えば潟上市立天王小学校で実施されている「ブックメニュー」では、「学校サポーター」と「学校栄養士」を中心に、教員間の連携・協力により、取組が実施されている。豊後大野市立朝地小・中学校の事例についても、学校司書をはじめ、各教員が読書推進に関する関係組織に所属し、取組が推進されている状況にあることがうかがえた。

このほかに詳細調査にて情報を得た事例に関しては、図書委員などの児童・生徒が主体的に活動することにより、全学年・全生徒を対象に読書活動の取組を実施している事例も見られ、これら教職員と児童・生徒間の関係性のあり方も重要になることがうかがえた。

**【学校と公共図書館・民間団体等との連携】**

「③学校と公共図書館・民間団体等との連携」に関しては、主に公共図書館・書店との連携事例が見られたが、団体貸出等による連携・協力だけではなく、専門人材を学校に派遣することによる読書活動推進事例について情報が得られた。

大分県で進められているアドバイザーの派遣事業では、その成果として、学校図書館の利活用の状況が改善されたとされているが、受け入れ側の学校に学校司書が専任で配置されている学校でないと取組が難しいことなど、人材等確保・配置の点が課題になることがうかがえた。清須市立図書館で実施された中学生向けのビブリオバトル実施支援の事例に関しても、取組には一定の成果があると認識されているものの、担当教諭の異動により継続的な取組が難しくなっているなど、組織間をつなぐ役割を担う人材を育成すること、あるいはノウハウを伝授していくこと等が課題となっていることがうかがえた。

**【青年期における取組、(再び)興味を持ってもらうための取組】**

「④青年期における取組、(再び)興味を持ってもらうための取組」に関しては、主に高校生の不読率の高さを課題認識とした取組について、例えば愛知県立緑丘商業高等学校では、読書習慣がない高校生にも読書に目を向けてもらうため、展示や蔵書選定等に関する工夫がなされている。大分県佐伯豊南高等学校での「よむよむら」の事例についても、高校生がより本を読むようになるための取組であり、「読書マラソン」のような取組を、高校生段階でも実施することで一定の成果が見られているとされている。なお、これらの取組については、学校独自の取組であるがゆえに、取組にかかる費用等をどのようにまかなうかという点が課題になりうることがうかがえた。

このほか、愛知県・愛知県図書館では、自治体の取組として、高校生向け、「ヤングアダルト」向けの施策を展開しているが、これらの取組事例からは、それぞれ単独の取組のみならず、各関係機関との情報共有等を図っていくことも重要であることがうかがえた。

**【地域内での連携、学校種間の連携】**

「⑤地域内での連携、学校種間の連携」に関しては、各地で関係機関・団体間の連携・協力の推進を意識した研究・会議の開催等がなされているが、特に芸西村の事例では、図書館と幼稚園・保育所、小学校・中学校と情報交換・共有の場を定期的に持つことのほか、具体的な取組として、図書館ガイダンスが実施されており、保護者も巻き込みながら、地域内での連携が推進されている状況にあることがうかがえた。

これら地域内で多様な組織・団体等が関わりを持つ連携体制推進のためには、連携・協力を推進していく中心的な役割を果たす機関が必要であるとの課題認識が示されている。

### (3) 地域における読書活動推進のための体制整備に関する考察

本調査研究では、子供の読書の実態や不読の背景・理由等を把握し、また、各地域で実施されている子供のたちの読書推進に関する取組の状況について情報の整理を行った。

各種の調査の結果から、家庭、学校、自治体・図書館等、それぞれの立場から、子供たちの読書活動の現状について課題認識が持たれており、また、様々な取組が推進されている状況にあることを把握することができた。

他方、現状における課題として、家庭における取組状況については各家庭の事情等により差があると考えられ、調査結果として、保護者の読書習慣や家庭の蔵書数の多寡等についても状況の差があることが把握された。学校・学校図書館（図書室）に関しても、特に高等学校段階においては、必ずしも読書に関する取組が積極的になされている学校ばかりではないのではないかと考えられ、調査結果から、学校図書館（図書室）の整備・活用状況について、小学校、中学校、高等学校と学校段階が上がるにつれて、子供たちからの肯定的な認識の度合いは低くなっていることが把握されている。このほか、地域の公共図書館や書店等についても、子供たちが本に触れ、読むための場所として非常に重要な位置づけにあると考えられるが、必ずしも「子供だけでいける距離」に図書館や書店等がある状況ばかりではなく、限られた地域のリソースをいかに有効に活用できるようにしていくかという点は一つの課題になっていると考えられる。

ただ、現状としてこのような課題がある中で、学校・学校図書館（図書室）は全ての子供たちに対して共通の機会を提供する場になりうるものである。高校生に関しては不読率が高い現状はあるが、調査結果として、学校における取組をより推進していると考えられる学校群では生徒の不読率が低い傾向が見られ、学校において読書に関する取組を推進することは不読の解消等に関して、一定の影響を及ぼしているものと考えられ、今後も一層の取組の推進が重要になる。

学校における取組をはじめ、地域における取組を効果的に推進するためには、学校内の教職員のほか、公共図書館職員、保護者、あるいは子供自身が、連携・協力しながら取組を実施していくことが重要であるということが、ヒアリング調査から、あらためて把握することができた。また、それぞれについて、継続性のある取組としていくためには、人的資源を継続的に担保できるようにすることや、ノウハウの伝達の仕方等について検討を行っていくこと等が課題となりうるということをうかがい知ることができた。

本調査研究で取り上げた取組の中には、他の地域・学校での取組を参考にしはじめられた事例もいくつか見られた。また、読書推進に関する計画が策定されたり、協議会等の組織が組成されたりしたことにより、取組が推進されたという事例もある。本調査研究では、できるだけ多様な取組事例を取り上げるようにし、また、取組の概要とあわせて、取組の経緯や成果、課題点等についても紹介した。これらの情報が、今後全国の各地域において子供たちの読書活動推進を図っていくにあたり一助となればと考える。